

風の便り (第86号)

発行日:平成 19 年2月

発行者:三浦 清一郎

「男女共同参画」－男の履修義務－

1 男たちの覚醒? －柳沢発言の功罪－

今回の柳沢大臣の「女性は産む機械」発言ははからずも筋肉文化（労働と戦争を筋肉が支配してきた時代の男性主導の文化）の中で支配的な位置にいる男たちの本音が出た、ということであろう。

発言を受けて、「筋肉文化」に対する女性の怒りが爆発した。女性の猛反発を受けて頭の固い男たちも少しは「少子化」問題の本質が分かったとすれば、「発言の功績」は大きい。当然のことであるが、子どもを産むか産まないかは女性の意志である。子どもを健やかに育て得るか、否かの将来予測も女性の判断による。少子化の防止は女性の納得と協力がなければ一步も進まないのである。「子育て支援策」の本質もそこにある。それゆえ、「養育にお金がかかる」という判断で少子化が進み、子どもの「教育が心配だ」という判

断で少子化は更に進む。「子どもだけで留守番させるわけにはゆかない」という判断で、「男女共同参画－女性の社会参画」は足踏みし、男の協力が得られないという不安と諦めの中で子どもを産もうとする意志そのものがしぼんでしまうことだろう。そこを理解しない男たちが「家庭の教育力」や「少子化対策」発言を繰返しているのは誠に滑稽で馬鹿げている。男たちが企画する少子化防止策は相も変わらぬ現行行政の福祉と教育の分離を前提とした「分業」・「縦割り」の発想からほとんど一步もでていない。文部科学省は「教育の不安」にしか対処しようとししない。厚生労働省には「保育」や「保健」の発想しかない。“偉い男たち”はなぜ少子化対策が複合問題であることを理解できないのか？

2 少子化も男女共同参画も晩婚化も非婚化も熟年離婚も根っ子は一つである

「筋肉文化」は女性を対等に扱ったことはない。戦いと労働において人類史の過去数十万年女性が主役になったことはなかったからである。「女・子どもは引っ込んでいろ」、「女のくせに」口を出すな、はその象徴的表現である。

女性は「産む機械」発言の裏側には子育ては

女の役割という思想があり、女性は男性を支えていれば良いという感性がある。専業主婦を「扶養家族」として位置づけてきたのも同根の発想である。

それゆえ、青少年育成の大会に行くと、いつでも「家庭の教育力」が問題となり、しつけは家

- 1 ● 「男女共同参画」－男の履修義務－ P 1
- 2 ● 「風」の教育機能－集団の治癒機能 P 4
- 3 ● 第 75 回移動フォーラム：子どもフォーラム in 綺羅星 7 報告 P 6
- 4 ● 第 2 回「ひとづくり・地域づくりフォーラム in 山口」報告 P 8
- 5 ● Message To and From P10
- 6 ● 編集後記：忠実な筋肉、正直な食欲－感覚体への絶えざる「負荷」 P12

庭が責任を持って行えという大合唱が起り、しかもそれが結論である。現状で、家庭を責めることが女性を責めている事になることを発言した当人も自覚していない。育児の大半は女性が担当せざるを得ない実態は明らかである。「家庭の教育力」を問題にするのであれば、家庭教育に関わって来なかった男のあり方をこそ問題にしなければならない。チョボチョボと「オヤジの会」が動き出したくらいで男が子育てに参加したことにはならない。それを自覚した時初めてこの国の男たちの働き方が問題になるであろう。少子化は明らかに複合問題である。当然、単なる経済・財政

問題ではない。従って、結婚奨励金や出産手当や児童手当の問題だけではない。政治は思想や理念を施策に「翻訳」しなければ、政治をしたことにはならないが、「翻訳」の手法が行政の既存分業体制に縛られて総合的計画が立てられないところに、一向に少子化防止策が進まない理由がある。

男女共同参画の思想は文化の問題であるから、政治施策のように今日、明日の議会決定で変わるようなものではないが、問題の根源が「筋肉文化」にある以上、文化の修正を可及的速やかに施策化しなければならない。

3 男女共同参画のシークエンス（優先順位の配列）

男女共同参画の基本計画を見ると、育児書の助言と同じように国も県も対策は常に「総花的」である。もちろん、基本計画や条例に書かれたことはすべて正しいのであるが、問題は限られた予算や時間の中でどれから取り組み、どこが基本なのかを見極めて実施することである。換言すれば、正しいことは沢山あり、大事なことも沢山あるが、それらの中でもっとも緊急を要する「優先事項」を決めて、施策実施の順序を明確にすることである。政治も、教育も、男女共同参画も、施策や方法の優先順位とそれらの組み合わせによって中身は全く違ったものになるのである。例えば、学校が言う「知・徳・体」の「調和的発達」は全く正しい教育論であるが、ここに示された「順序」のとおり、知的な基礎学力から取り組もうとすれば、現代の少年教育は是正できない。筆者が主張してきたように、子どもの「生きる力」が衰退著しい現在、学校は従来の「知・徳・体」概念の「順序」を入れ替え、「体・徳・知」の順序にしなければ、「教科指導」の成果は上がらないのである。

「知・徳・体」も、「体・徳・知」も含まれる要因が同じなのだから、どのような順序で言おうと同じだろうということはまちがいである。それが「シークエンス（Sequence）」の重要なところである。住宅建築の要因が「基礎」と「土台」と「柱」と「壁」と「屋根」であるとしても、「柱」から工事に着手する人はいない。教育も同じである。現代の多くの子どものように、45分の授業に集

中することもままならない「体力」や「耐性」を前提にしてはどのような知的あるいは道德上のトレーニングも大いに困難である。個々の教師の努力にも関わらず成果が上がらないのは、指導の「受け手」である子どもの学習する基本条件が整っていないからである。「基礎学力」や「豊かな心」が重要であることは論を待たないが、それだけを取り出して子どもに指導することはできないのである。教育指導には順序性があり、優先事項の選択と組み合わせによって教育成果は変わり、学校の特色も変わるのである。

政治のマニフェストも、行政の年次計画も同じである。大事なことを並列して列挙しただけでは内閣の「特性」は分らない。何を一番に持って来るか、で内閣の特性が決まるのである。

少子化の防止や男女共同参画の推進も同じことである。国は男女共同参画を推進する第2次基本計画を決めたが、実行をどのように担保するのか？大事なことであっても「総論」・「抽象論」を並べただけでは前に進まない。

筆者の提案はたった一つである。少子化を止めるためには現在の女性の負担を軽減するしかない。方法はいくつかある。第1は、男が家事や育児を分担し、男女共同参画理念を履修することである。第2は、「保教育」の理念に立った「養育の社会化」を一気に推進することである。第3は、女性を意志決定過程に参加させることである。そのためには政府に強制能力のある現行の行政

システムの中の女性管理職を一気に拡大する事である。これからの5年間で女性の研修を徹底的に強化し、その成果を受けて現在の公的システム；なかんずく役場や市役所の人事に女性の管理職を一気に増やすことである。女性の意志と発想が意志決定過程に反映できるようになれば、そこ

から先は女性の自己責任で事が進む。そうなれば「女性は産む機械」発言も、子育て支援と子どもの遊びの奨励を混同するような愚かな施策を発想する政治家も消えるだろう。それでも少子化が止まらなければ、それこそが国家の選択として甘受しなければならない。

4 「男女共同参画」－男の履修義務 一家事への共同参画は男を救う－

男に求められているのは、家庭生活における「対等」の「実践」であり、「対等」の「負担」である。女性が家庭の外の「社会的領域」に進出した分だけ、それに応じた男性の「私的領域への参加」が不可欠である。私的領域とは育児と家事に代表される日常生活の責任であり、役割である。社会的活動における男女共同参画は既に法的に決定されたが、法が縛ることができないのは私的領域における男女共同参画である。育児・家事への男性の参加は社会の建前にすぎない。

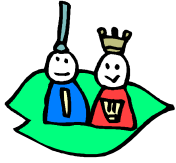
家庭の男女共同参画は法や行政計画の建前から最も遠く、社会運動の中で進み方のもっとも遅い領域なのである。育児・家事の大部分は女性が担当しており、このことは妻が常勤の場合でも変わらないと数年前の厚生白書も指摘している。それゆえ、女性の不満は子どもが成人し、独立した後に沸騰する。子どもがいる間は、家事の負担が女性に偏っていたことに敢えて目をつぶっていたとしても、二人だけの生活が始れば、なにゆえに炊事、洗濯、掃除、風呂の準備まで女性が日常負担のすべてを追わなければならないのか？なにゆえ、自分だけが追うべき責任と役割が残ったのか、疑問は当然であろう。

私生活において男が女を「対等」に処遇してこなかったことは夫の定年後に明白になるのである。問題は男たちの自覚と感性にある。「稼ぎの主力」であったという自負が妻の「不満」・「負担感」に対する男の鈍感の背景であろう。国のシステムですらも、「扶養家族」概念に象徴されるように、主婦の労働貢献を正当には認めてこなかった経緯がさらに男の感性を鈍感にしているのである。

男の履修カリキュラムは料理、洗濯、掃除などこれまで当然女性の仕事としてきたことを率先して学んで、実践することである。そこから先の新しい共同生活はそれぞれの家庭が築いて行く男女の創造的領域である。どう抗弁しようと私生活における男女の共同において男はフェアではないのである。「変わってしまった女」は「変わりたくない男」の不公平な思想や感性には決して寛容ではなくなったのである。熟年離婚はそこに発生する。

女性が家族に求めているのは家事の「外部的」ではない。ましてや家事の電化でも、機械化でもない。求められているのは男性の全面協力である。「女は家事をやれ」という男の思想と感性の変革である。女性の側のこの単純な主張が分からない政治や行政がいくら子育て支援策を講じようと少子化は止まらない。若い世代であっても、育児支援策以前に、「変わってしまった女」は筋肉文化の教育を受けた「変わりたくない男」とは結婚をしたがらず、女性にとって現状で自分の基準に合った男性に巡り会うことも決して簡単ではない。

自立した女性にとって、男性優位のシステムの中で結婚することは、己の主体性と自由を放棄することを意味している。自由を失うことは社会的・心理的コスト以外のなにものでもないのである。「晩婚化」も、「非婚化」も男性優位の思想と感性に対する女性の抗議を象徴しているのである。「変わりたくない男」が変わらない限り「少子化」も当分は止まらない。



「風」の教育機能－集団の治癒機能

一年ぶりの「豊津寺子屋」の有志指導者の連絡会議を開いた。年間の活動評価と今後の要望事項を取りまとめ、指導チーム毎の研修・準備会議の開催補助金制度が創設されて指導者の皆さんの話が弾んだ。懇親・交流会のテーブルはそれぞれの指導チームの組み合わせで配置され、一年の苦労話に花が咲いた。筆者も複数のテーブルを回って皆さんの提言と苦労話や感想を聞かせていただいた。夏休みに日常メニューの重点指導をして、月内のどこかで、「子どもの料理当番の日」を決めて家族の夕食は子どもが引き受けられるようにしたいという料理指導グループの企画に大いに賛同した。具体的な「家庭の教育力」支援とはそういうことを言うのであろう。学期初めに学校が雑巾をもって来るように指示するので、事前に裁縫の時間を設定して、子どもに雑巾を縫わせ、合わせて運針の基本を教えたいという手芸グループの抱負も聞いた。「単身赴任」や「定年後」に自分でボタンの一つも付け替えることができれば助かるよ！という発言に「いくらなんでも心配が早すぎるよ！」と茶々がはいって、笑いも湧いた。

話はいつしか一年生の T 君のことに移った。彼は寺子屋への途中入学生である。筆者は、彼の入学後一週間ぐらいの後に指導の機会を持ったが、Hiper Active（多動的）な言動に我が目を疑った。整列した「寺子屋」集団の列の中に立たせておくことがそもそも容易ではない。筆者はいつものように、正しい姿勢を強制し、尻を叩き、大きな声も出した。しかし、T 君の姿勢は 10 秒も持たない。担任の苦労が目に見え、自己コントロールがほとんどできない以上、学校の授業に参加することはまず不可能であろう。寺子屋の指導

はこの子一人のために崩壊するのではないか、という不吉な予感も持った。

直立できない。姿勢を保つことができない。集中できない。指示が通らない。筆者の説明を 30 秒も聞くことはない。奇声を発する。「寺子屋 4 か条」の心得の宣言から「雨にも負けず」の朗唱まで、仲間が何をやっているのか分かっているとは思えなかった。その結果、集団行動はほとんど全く取れなかったのである。

しかし、その後、彼はめげずに毎日「寺子屋」に来ていたという。日々、指導と事務連絡のために寺子屋へ詰めている寺子屋主事さんの一人から彼の言動に著しい変化が現れてきているという報告があった。別のテーブルのもう一人の主事さんにも、更にもう一つのテーブルにいた男性の有志指導者にも確かめてみたが、T 君の言動の進歩の事実は間違いない。

今では「直立・気を付け」ができるようになり、列を乱す行為も明らかに減少した、という。奇声は時々発するが、指導者の注意に耳傾けるようになってきたという。「雨にも負けず」の朗唱にも参加して、口を開け、声が少しずつ出ているという。ドッジボールのやり方が分かって面白がって参加するようにもなった。何よりも縄跳びが少しできるようになり、動作は不器用であるが、大縄跳びにも他の子どもといっしょに飛び込んで遊ぶことができるようになってきているという。最初に跳べた時は満面の笑みを漏らして、「お母さんに見てもらいたい」と言ったんです、と主事さんはかすかに涙ぐんだ。

寺子屋は「型」をしつけている。背景の理屈は分からなくても、子どもの言動は「型」にはまってしまう。それゆえ、早い、遅いの差はあるが、

大部分の子どもが初めは「できなかったこと」も少しずつ「できるようになってゆく」。原理は教育の3原則である。「やったことがないからできない」ということは「やらせればできるようになる」ということである。「教わっていないから分らない」ということは「教えれば分かるようになる」ということである。「練習が足りないから上手になっていない」という現状を打破するためには、「手本を示し」、師弟同行で体験的に指導し、応援の言葉を繰返ししながら反復練習を厳守するしかない。

しかし、「型」の習得といえども、習得の「前提」は子どもの「学ぶ能力ー学ぶ条件」が「機能している」ことである。時と所をわきまえず奇声を発し、整列ができず、指導者の指示が聞けない子どもはこの「前提」には入っていない。当然、そのような子どもには「体力」も、「耐性」も鍛えることは難しく、そもそも学ぶことの基本条件が整っていない。筆者の見限り、T君は寺子屋の指導の「前提」の範囲外であった。

嬉しい限りであるが、T君の進歩は予想外・

想定外である。寺子屋における整然たる集団行動がもたらした治癒機能の結果である、と想像している。指導者の先生方の親身な励ましの賜物でもあろう。そして何よりも集団を形成する他の子どもたちの「集団圧力」がT君に巧まざる「感化」の力を及ぼしていると考えられる。寺子屋に意図的に「吹かせてきた風」にT君が学んでいるものと考えざるを得ない。寺子屋は指導者の目が届く中で「みんなそうする」のである。個々の子どもはみんなの行動や思いに適応して「ぼくもそうする」のである。今後、彼が他の子どもと同じように集団に自らを合わせ、集団の行動規範に適合して、自分を律することができるようになれば、予想外の教育の福音である。

長崎県壱岐市の霞翠小学校の子どもがなぜこの“軟弱な”教育風土の中で50数キロの鍛錬遠足に耐えうるのか？島根県出雲の浜田校長の指揮する通学合宿の子どもたちが波風や潮の流れと戦いながら「サバニ」の「荒行」に耐えうるのか？答えは同じく、先生方が作り上げた「集団の質と風」の中にあるのかもしれない。

＊ ＊ お知らせ：第76回生涯学習フォーラム ＊ ＊

今回はこれまでの「フォーラム」の持ち方に“訣別”“する記念研究会を想定しています。現在のフォーラムが始った時と同じように島根県の出雲市から浜田満明校長先生が駆けつけて、発表もして下さることになりました。報告は学校主催の『通学合宿』の原理と方法」です。また、別記報告に総括した山口県「第2回ひとづくり・地域づくりフォーラム in 山口」の熱気を引っさげて、山口県生涯学習センターの赤田博夫主査が大会を支えた人々の協力と連帯の背景の原理を報告して下さいることになりました。

1. 実践研究発表1 浜田満明（島根県出雲市立東小学校校長）
「集団・共同の意義を体感し、体験の欠損を補完する学校主催の『通学合宿』の理念と方法」(仮)
2. 実践研究発表2 赤田博夫（山口県生涯学習センター主査）、大島まな（九州女子短期大学助教授）
「実践のための学習を前提とした宿泊型継続研修における人間関係の形成過程と実践力の意義」(仮)
3. 論文発表 三浦清一郎 「地域が作る学校と学校が貢献するまちづくり」(仮)
4. 提案と相談「これからのフォーラム」
5. 懇親夕食会 ふるってご参加ください。（場所・方法は未定です。）

第 75 回移動フォーラム：子どもフォーラム in 綺羅星7

(於：島根県益田市、'07・2・17～18)

◆ 1 ◆

初発集団 (Initiative Group) のちから

担当した報告の中で筆者はひたすら益田市長に向かって語りかけたつもりである。綺羅星7の大会が継続できた背景も、筆者が報告した「豊津寺子屋」も事業化も中核として関わった初発集団の力が何よりも大きい。しかも、初発集団の発想と理念がその後の活動の方向を決定する。綺羅星7の大会には沢山の人が関わったことは見聞すれば分ることであるが、それでも初発集団を

形成し、自らをブーフーウーと呼んだ大畑、渋谷、寺田3氏の力は大きい。残された課題は市長や教育長が彼らが作り出した民間活力の渦をどのように評価し、どのように活用するかにかかっている。

少なくとも市長には子育て支援の取るべき方向と彼ら初発集団の存在の意義が通じたと信じている。

◆ 2 ◆

『遠足』の効用

福岡から益田行きは遠出である。往復を列車の旅にしたのでまさに生涯学習フォーラム同人の”遠足”の気分であった。同人それぞれが限定された目標や目的の達成を目指して忙しく暮らしているが、遠足はそのような精神の緊張をほぐしてくれる。車による効率移動の中で忘れていた旅のくつろぎを思い出した。車中で廻ってきたお菓子も、一杯の珈琲も、昼食時にみなさんが喉を潤した地酒の「初しぼり」の雰囲気も遠足ならではのものであった。大会の一幕が終り、宿の一部屋に集合して四方山の話に興じるひとときも日々のそれぞれの戦いを和やかに反芻する良い機会になった。日常を離れて、少し距離を置いて

自らを振り返る作業はわるくない。戦っている人間には休息が必要であり、戦っているが故に束の間、仲間と共にする休息の有り難さが身に滲みた。これまで福岡は大会にしても、フォーラム研究会にしても主催地であったが故に、各地の人々を迎えることはしたが、各地に積極的に出向くことはしなかった。福岡県立社会教育総合センターに依存してきたフォーラムのやり方と訣別することによってわれわれ”初発集団”は、今後、遠足や交流の楽しさを発見するだろう。「生涯学習移動フォーラム」の始まりである。

◆ 3 ◆

「教育公害」論の前の「教育論」公害

大会の2日目は最後になってえらく疲れた。原因は大会エンディングの総括であった。筆者は次の出版執筆に日本の近未来の教育公害を論じ

るつもりであるが、綺羅星7の大会総括は、結果論としての「教育公害」以前の「教育論公害」の存在を自覚せざるを得なかった。担当したインタ

ビューダイアログの「司会」のなかで、筆者は懸命に子どもを一人前にして行くプロセスの方法と中身を論じてもらったはずであった。当然、議論の前提は、社会が「要求する」一人前の条件にどう子どもを導いて行けばいいのか、に集中してゆく。子どもの自立が期待通りに達成できれば、保護者の子育てに関する「負荷」を軽減できる筈であった。しかし、「総括」は子どもの問題は「子どもに聞け」という結論になった。なんたることか？子どもの「視点」に立って「一人前」への発達過程が論じられるのであれば、そもそも「一人前」の概念そのものが不要である。

社会で生きて
行くための基準は
社会が設定する。
子どもが設定す
るものでは断じてない。子どもが興味を持とうが、



持つまいが、子どもがやりたかろうが、やりたくなかろうが、やるべきことはやり、やってはならないことはやってはならない。この約束を守らなくても良いとして、放任すれば、社会は崩壊する。またまた「論敵」は大学教授であった。子どもフォーラムは現代の子どもが様々な問題に直面して様々な危機的状況が発生しているからこそ開かれたのであろう。今のままでは多くの「半人前」は「一人前」になれないのである。その時、子どもの視点のみを全面に出した大会総括者を選んだのは、大会を企画した「初発集団」の合意によるものであろう。ぶーぶーの3人が口当たりのいい、「お涙頂戴」の教育論に毒されることのないことを切に祈りたい。社会の視点を欠落した「教育論」こそが「教育公害」の発生源であることを再確認した大会であった。



大切なのは「個別事例」ではない—事例を貫く「原理」と「方法」である。

大会最終のインタビュー・ダイアログでは、日本人の知的能力が低下したのではないかと心配させる場面に出会った。それは個別の事例に振り回されて、事例を貫く「原理」と「方法」を見ようとしぬ発言者が目立ったことであった。

出雲市の浜田満明校長の「学校主催の通学合宿」は合宿を語りながら「欠損体験」を補完することの重要性を説き、実施の過程における教師集団の創意工夫と挑戦の精神の重要性を説き、子どもの変容過程の仕組みを解明して、保護者が変わって行く過程を解説してみせた。力点は、プログラム展開の個別状況ではなく、プログラムを貫徹している理念的背景と方法上の「原理」を力説したのである。しかし、多くの参加者の発言は「原理」には反応せず、自己の思いや感情を告白し合って、仲間を発見し、人間関係の輪の中に入ることのできた母や子どもの個別のショート・ストーリーやエピソードに反応したのである。しかし、子育ての実質的作業は、ほっとしただけでは終わらない。自らの居場所を見つけても、子育ての緊張や負担感から解放されて一時的に救われたと

しても、「一人前」の育成の任務も義務もまだまだ終らない。大切なのは「個別事例」ではない—事例を貫く「原理」と「方法」である。

プログラムの終了後、登壇者から紹介されたエピソードに感動して感涙にむせんでいるお母さんに会った。お節介かもしれないが、彼女の今後の子育てが心配である。登壇者の一人が指摘したように、「三つ子の魂百まで」のしつけに失敗したとしても、確かにその後の努力で「欠損体験」は教育的に補うことはできる。また、「親の思いは必ずしも子どもに通じるものではないのだ」、ということ会場の人々と共有したとしても、「子どもに学ぶことをきちんと学ばせてもいい」ということにはならない。子育てにそんなに肩に力を入れなくても良いんだと慰められたとしても、あなたはこれから子どものトレーニングをどうするのか、という問いは残る。悩みを癒され、気持ちがほっとしても、発達支援の内容も、方法も何一つ学んではいけないだろう。親を慰めるだけなら、カナダが発信元の「だれも完璧な親ではない (Nobody's perfect)」というプロ

グラムと同じである。だれも完璧ではないんだ！みんな悩んでいるのだ！！私だけが子どもに思いを伝えられない訳ではないのだ！！と多くの親の現状を追認することから出発する。現状はその通りであろう。

しかし、これらの思いの再確認は子育ての悩みの出発点であって、断じて結論ではない。子ども

もの発達と成長の原理をいわず、子育ての方法と日々の養育行動の中身をいわずに幼少年教育の改善はできない。ブーフォーウーよ、登壇者の選択に留意してしっかりしてもらいたい！！子育て混迷、教育混迷のさなかに「教育論」公害の拡散は罪が深い。

第2回「ひとづくり・地域づくりフォーラム in 山口」

(於:山口市セミナーパーク、'07・2・24~25)

◆ 1 ◆

ー筆者が行なった総括報告の概要ー

●1● 大会の成功は「参加者」でもあり、「運営者」でもあったボランティアのみなさんの活力と気合い気配りの賜物であった。

●2● 参加者の第1感想は「実践は強い」ということであった。中身と方法に賛否両論はあっても、研究者の空論に優っている。

●3● 生涯学習実践は「行政主導」から「市民参画」に移行している。生涯学習理念の浸透が従来の「受け身の学習者」を「創造と実践の市民」に変革しつつあることは疑いない。

●4● 個々の「優れたモデル」は存在する、しかし、「モデル」は孤立し、システムにもネットワークにもなっていない。千里の馬は常にあれども、伯楽は常にはあらず。「優れたモデル」を見抜く行政の「伯楽」が誠に貧困である。

●5● 個別の発表を通して聞こえてきたのは「学校との交渉が一番大変だった」である。学社連携で気を吐いている学校も登壇したが、いまだ社会の「シミ」のごとくであって、「点」にも

なっていない。大半は生涯学習の「抵抗勢力」を形成している。

●6● 「概念」の力に注目したい。「社会体験」なしに「社会の一人前」は育たない。学校文化は教育を「粉飾」するな。子ども問題の発生は「過保護2世」が世に出たからである。コミュニティ・スクールは進化して”School-centered community”を形成すべきである。

●7● 昔の知恵が生きる場合もある。生きない場合もある。伝統が大事な場合もある。伝統が「敵」になる場合もある。過去の経験を現代に適用するためには「干し椎茸」を水に浸して戻してから使うように、使い方が肝要である。しかし、過去の経験が全て有効で使用可能な「干し椎茸」になるはずはないではないか！！

●8● 次の実践につながらない研修も、大会も全て税金の浪費であり、徒労の時間である。大会の意図が意味あるものになるか、否かは参加者の次の行動にかかっている。ボランティアが支えたという点で希望はかすかにあるか！？

◆2◆ 概念の力(1)―「過保護2世」

「過保護2世」の概念は第2回山口の人づくり・地域づくり大会で飯塚市の森本教育長が提起した言葉である。20数年前、森本教育長や筆者が若かった頃、福岡県のPTAの協力を得て、8,000人の保護者の「養育行動」の調査を行ったことがあった。調査結果は明らかに養育の全分野に及ぶ過保護の実態を浮かび上がらせた。

筆者の分析の結論は養育における「4つの過剰」であった。4つとは、「保護」の具体的機能を形成する「世話」の過剰、「指示」の過剰、「授与」の過剰、「受容」の過剰である。4つの過剰が子どもの日常生活で継続されれば、当然、子どもの体験は「保護の過剰」によって制約される。「欠損体験」が発生するのは当たり前である。結果的に、多くの子どもはいまだに「自分のことは十分にはできない」、「自分のことを決められない」―「結果責任も取れない」、「モノには不自由しなくなっても、感謝の心を忘れ」、「わがままで、欲求の自己抑制ができない」。筆者は、数年後には、社会規範に従わず、自立できない子どもが氾

濫するであろうことを予告した。森本氏によれば、それが「過保護1世」の世代である。従って、「1世」の親は「過保護原世代」である。

4つの過剰を満身に浴びた「過保護1世」は不幸にもその「欠損体験」を教育的に補完することなく、今や親になったのである。「過保護1世」は当然「過保護原世代」に輪をかけて「4つの過剰」を養育に取り入れたことは想像に難くない。かくして、「過保護2世」の世代は、親の世代に比べてさらに軟弱で、わがままで、自立していない。「やったことのないこと」が多く、「教わったことのないこと」が多く、「反復練習の機会」は少ない。体験の欠損は生活の全領域にわたり、自立のレベルは低い。「生きる力」の基礎を形成する「体力」も「耐性」も極めて不十分である。育児と教育の失敗は社会の病理を深刻化し、「教育公害」を助長する。「過保護2世」の概念は問題の核心を抉りだし、問題発生の原因を直撃している。概念の力である。

◆3◆ 概念の力(2)―「教育の粉飾」

メディアの記事や分析には世間の「受け」を期待したセンセーショナルで、無責任な報道も多いが、真面目な記者の冷静な分析には耳傾けて聞くべきことがあった。山口大会に登壇した読売新聞の南 隆洋氏の学校文化の分析は筆者の疑問を「教育の粉飾」というたった一言の「概念」で氷解させてくれた。まさに概念の力であった。南氏の分析は学校がシステムにおいても、学校文化においても、社会に開かれていない組織であることに集中した。

取材に行けば学校の風土は外部に開かれていないだけでなく、内部にも開かれていないことが分かるという。学校で発生する問題が社会で共有されないのは「学校は完璧」であり、「学校は間違いを犯さない」という学校の「無謬」神話を

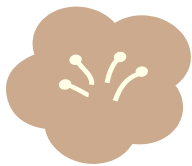
信仰する組織文化が出来上がっている、からだという。「完璧性」や「無謬性」の神話を守り通そうとすれば、学校はますます世間体にこだわって、真実や客観性から遠くなるというのである。できていないことをできていると主張し、やれていないことを努力していると置き換え、問題の実態をあたかも問題自体が存在しないかのごとくに総括し、外部の人間の学校への関与を峻拒し、税金でたてた「公的施設」を独占・占有し、外部への情報公開を拒絶する。

結果的に、学校から出てくる報告には外部のものにとって「教育の粉飾」に近いものが多い。事実は、意図的であれ、無意図的であれ、隠蔽される傾向が甚だしい。決算の粉飾は犯罪であるが、「教育の粉飾」も罪が深い。

いじめの対応が遅れるのも、説明が2転3転するの、学校内で挫折した教員や、問題教員の救済や矯正ができないのも、原因の大元は学校の「無謬性」を取り繕う「教育の粉飾」体質にあるという指摘であった。粉飾された決算から経営の実態は診断できない。粉飾された教育報告から子どもの問題の解決策は生まれるはずはない。事実を隠さない診断があつてこそ、より適切な処方が可能になる。学校は施設を開放し、情報を公開し、他の分野との連携・協働を進めて「無謬性」神話と「粉飾」体質から訣別すべきである。

大会当日は、他の登壇者から、メディアは「犯人探し」、「犯人たたき」をやりがちだという批判にさらされたが、南氏は自分が探しているのは

「事実」であつて「犯人」ではないと断言した。その事実がなぜ関係者の取材から出てこないのか？経営体の決算は「監査人」が行うが、教育には「監査人」はいない。そこに「教育の粉飾」とめられない理由が存するのである。学校教育法 85 条があつても、社会教育法 44 条やスポーツ振興法 13 条が存在しても学校が進んで自らを開くことは皆無に近い。同族経営の粉飾決算体質と比較する時、なるほど事実が国民の前に明らかにならない学校組織文化の体質を垣間みることができる。「教育の粉飾」概念は端的に学校が自己変革できない背景を白日の下に曝しているのである。



MESSAGE TO AND FROM



お便りありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがございましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★ 長崎県長崎市 武次 寛 様

過分の郵送料をありがとうございました。定年の準備が必要です。一番恐ろしいのは「自由の刑」です。精神が衰退し、活力が低下し、食欲や睡眠、興味や関心を奪い去ります。日常の私を救ったのは英語ボランティアでした。それゆえどんなに忙しい時でも指導を続けています。仲間も増え、思いがけぬ交流も生まれています。

いずれ私も加齢と共にやがてどこからも執筆の依頼も、講演の依頼も来ない日が来るでしょう。それは言わば「最終定年」です。その時に備えて、自宅で子どもの学習指導を始めたいと恐る恐る妻に相談しています。私はしつけの悪い子は怒鳴ったりしますので、近所付き合いのトラブル

が予想されるということで、まだ「go sign」はもらえていません。しかし、『その時が来た時』では遅いのです。定年の準備は気力・体力共にまだ旺盛な時に始めなければ人々の関心も評価も得ることはできません。現役の時に始めなければならないのは、「自由の刑」の中では準備のエネルギーそのものが消え失せるからです。定年者の油断はここにあるのです。

★ アメリカ、ペンシルバニア州立大学 藤本 徹様

本日、2/21、東京電機大学出版部から本が届きました。『シリアスゲーム』の出版おめでとうございます。30 代前半での上梓は誠にお見事でした。ゲームの教育的応用は社会的影響も大きなも

のがあると確信しています。『世界の現実も、チームワークも、生きる智慧も僕はすべてゲームで学んだ』という帯の宣言文が衝撃的でした。

しばらくはアメリカの地の利の中でご活躍下さい。伝統的な日本文化は、多少の変化はあったとは言え、まだまだ「長幼の序」を「才能の序」と混同し、「年功」を「実力」の上に置いています。特に日本の大学は変化に鈍感で、外部に閉鎖的で、己に甘く他者に厳しい自己中心的風土で、なにより若い才能には抑圧的です。あなたが延び延びと活躍できるようになるのはまだまだ先のことでしょう。就職にあたってはかつての私の轍を踏まぬよう重々慎重に文化を選んでください。個性と創造性に寛容なこと、アメリカの風土に優れるところはまだないと思います。

★ 鳥取県大山町 山田 晋 様

山口大会の写真をありがとうございました。塩崎千枝子先生とは久々の“戦友”との再会になりました。また、大山の改革が壱岐市の霞翠小学校の取り組みと重なることにも改めて気づかされました。山田教育長と松田教頭先生の巡り合いは教育再生のドラマを予感させます。教育改革は小学校改革が核になることを確信しています。幼保一元化はプログラム次第でその先駆けになることでしょう。小学校が変われば、教育を尊び、教師を大事にしてきた日本の風土を生かして家庭の教育力にもてこ入れができる可能性が残されています。研究者にも共同実践、共同研究のできる現場が切に望まれます。小生もがんばりますのでどうぞお力をお貸しください。

★ VOL0 ヴォロの皆さん

過日、長谷川進一さんから VOL0 ボロ塾の結成通知をいただきました。楽しみです。今回の山口大会でのみなさんのご活躍はとくと拝見いたしました。人のおもてなし、大会の運営とはこのようにするのだというお手本でした。大会の成功を支えた第1要因は間違いなくみなさんを中心とした100人のボランティアの方々でした。「参加」と「運営」の二刀流は誠にお見事でした。中・四国・九州の生涯学習実践研究交流会の事務局を長年にわたって支えてきた永渕さんからは「福岡の大会に最も欠けているものを見せてもらいました」という感想でした。赤田さんも、大島さんも、私も、みなさんに見られていることを常に意識して、胸を張って仕事をしました。3/10（土）の福岡の生涯学習フォーラムでは赤田・大島のお二人が1年の研修過程を振り返り VOL0 ぼろ塾の結成に至る「方法論」と「交流の進化」の道筋を報告することになっています。VOL0 とはギリシャ語で生涯学習の意味であること今回初めて知りました。

★ 大分県日田市 安心院光義 様

フォーラム応援のお便り拝読いたしました。元気が出ました。たくさんの方々から支援の申し出をいただいております。しかしながら、これからは「拠点方式」から「出前方式」に転換する実験を開始してみたいと思います。これまでは福岡が拠点であったがために、たくさんの方々に福岡へお出でいただきました。われわれはそのことのありがたさに気づいていなかったのではないかと、いう反省もあります。そこで今後はすこしずつわれわれが出かけて行く新しい方法を試してみようという話し合いを続けております。どうぞ見守ってください。



編集後記：忠実な筋肉、正直な食欲－感覚体への絶えざる「負荷」－

「読み書き体操ボランティア」は筆者が主張する熟年の心身を健康に保つ処方である。中でも肉体の衰えは目に見えて進行するので体操は重要である。年を取れば身体が固くなる。咄嗟の反応も遅くなる。わずか数時間、ほんの一日、身体を動かさない読書や執筆に没頭すると、次の動作に移ろうとして立とうとした時に、筋肉も関節もこわばって、ほぐれるまでに時間を要する。熟年の日々には絶えざる柔軟体操が不可欠なのである。

ある日通っているプールに見るからに男っぴりの良いスポーツマンタイプの若者が来た。彼はひたすらプールを歩いた。水中でフットボールでも蹴っているつもりか、腕を振り、腰をひねって左右の足を交互に高く斜めに蹴りあげる。運動量が大きく、その格好が様になっているので多くの人々の注目を浴びた。バランスを取り、ウエストを引き締めるには良い運動であろう。ご多聞に漏れず腹が出て、メタボリックシンドロームを気にしている筆者も感心して眺めたひとりである。

翌日から、彼を真似て「水中サッカーボール蹴り」を始めてみたが、「見る」と「やる」とでは大違いである。練習の後には更に悲惨であった。背中から腰にかけて筋肉ががさがちに張ってしまっ立ち居振る舞いから歩行にまで支障が出た。老骨も、老筋肉も斯くのごとし、である。しかし、ここからが熟年の処方である。熟年は「無理をして、頑張り過ぎてはいけない」が、同時に「がんばり続けること」は極めて重要である。無理にならない程度に頑張り続けることは、「養生」の基本であり、修練のさじ加減である。要は日常に手抜きをせず、心身に「負荷」をかけ続けるということである。筆者も腰の張りにめげずに水中の想像上のボールを蹴り続けてみた。

数週間が過ぎた今、ようやくバランスを崩さず、ボールを蹴った足が高く上がるようになった。腰の張りも楽になった。筋肉や関節が運動刺激に忠実に適応したのである。肉体は誠に正直である。おそらくは内臓機能なども同様の法則の下にあるのであろう。運動の後にはこよなく飯がうまい。食欲は正直であり、間違いなく「空腹の関数」である。空腹こそが「最高の調味料」であることは疑いない。

「豊津寺子屋」の子どもたちはおやつのような「間食」をせず、日々全身運動の遊びやスポーツを続けるので家庭での食欲が旺盛であり、先日のアンケート調査には夏休みには3回に亘って弁当箱を大きくしたと報告してくださった保護者もいた。普段は子どもが好き嫌いを言って食べない食材も弁当の中に入れておくと、夏休み寺子屋のプログラムの中ではぺろっと食べてしまうという感想もあった。

「寺子屋」の「運動あそび」は大袈裟な「食育」のキャンペーンをどこかで笑っているのである。筋肉は肉体運動の刺激に忠実に反応し、自らを鍛え上げる。食欲もまた子どもの遊びや運動の結果の「空腹」に正直に反応する。金のかかる栄養士の配置などは無用である。子どものわがままや勝手を禁じ、子どもの日常に沢山の身体的遊びを導入すれば、大抵のものはうまい筈である。子どもも熟年も「生きる力」の基本中の基本は体力である。

ここまで書いた時、出版社から次の著作の第一次の校正が届いた。現金なもので猛烈に闘志が湧いてきて、「次の勉強も始めるぞ」、と気合いが入った。精神もまた一定の社会的刺激に忠実なのであろう。何ごとにもうつむきがちな向老期に「負荷」が必要であるという原理は変わらないのである。

『編集事務局連絡先』 三浦清一郎 住所 〒811-4177 宗像市桜美台 29-2

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。

『編集事務局連絡先』まで 2007年3月号～12月号をご希望の方:80円×10ヶ月(残月分)=800円
をご郵送下さい。

『オンライン「風の便り」』 <http://www.anotherway.jp/tayori/>